

2005 年度 東京蜘蛛談話会 4 月例会総会

- 1.日時 2005 年 4 月 17 日(日) 10 時より(開場 9 時 30 分)
- 2.場所 東京環境工科専門学校 〒150-0011 東京都渋谷区東 2-5-3
「JR 渋谷駅」東口(東急文化会館側)より、「学 03 日赤医療センター行」バスにて約 5 分、「國學院大學前」下車、徒歩 1 分、170 円
- 3.連絡 当日、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。 加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
- 4.その他 プロジェクター、OHP 等用意いたします。
- 5.同封のはがきで、氏名、連絡先、出欠、講演の有無、講演ありの場合には演題と使用希望機材(スライド、OHP、コンピュータ)をお知らせください。また、近況をお知らせいただけると幸いです。また、はがき以外の手段で下記にご連絡いただいてもけっこうです。

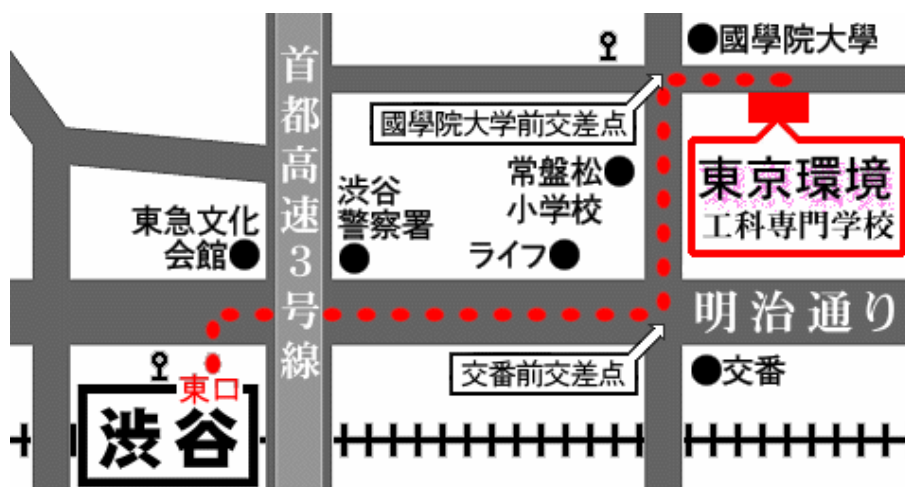
〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 有限会社 エコシス

初芝伸吾

mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp

Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

- 渋谷駅東口から徒歩 15 分です。坂道がありますので、バスを利用した方がよろしいかと思います。
- 東京環境工科専門学校及びその周辺には駐車場ありません。



2005 年度採集観察会

1. 期 日： 第 1 回 5 月 15 日（日） 第 2 回 7 月 10 日（日）
第 3 回 10 月 16 日（日） 第 4 回 2 月 19 日（日）
2. 場 所： 弘法山（神奈川県秦野市）
3. 集 合： 小田急線 鶴巻温泉駅改札口 10 時集合
4. 世話人： 池田博明

東京蜘蛛談話会 2005 年佐賀合宿予告

今からおよそ 100 年前の 1906 年に、ベーゼンベルクとストランの二人によって「ヤパーニッシユ・シュピネン（日本のクモ）」が著わされて以降、日本におけるクモ研究が本格化したといっても過言ではありません。そして、ここに記されたクモの多くは佐賀県に滞在したデーニッツ氏によって採集されたものでした。

日本のクモの研究はまさに「佐賀県から始められた」わけです。ところがその後、佐賀県のクモ相についての調査は全くといってよいほど行なわれてきませんでした。そこで、今回ここ佐賀県で採集観察会を実施して、100 年後の佐賀のクモリストを作成することにしました。多くの方々の参加をお待ちしています。

日程：2005 年 7 月 30 日（土）～8 月 1 日（月）

宿舎：佐賀県佐賀郡富士町古湯温泉「山水荘」Tel 0952-58-2131

担当：新海 明

なお、7 月 30 日午後、宿舎にて、「なぜ佐賀合宿なのか」というテーマで谷川明男氏と八幡明彦氏による講演会も予定しています。主な採集観察地は、コンピラヒメグモや *kompirensis* で名高い「金刀比羅神社」や、ユノハマサラグモや *yunohamensis* などでよく知られた「湯の原」周辺で実施する予定です。なお、申し込み方法や詳細な案内は 5 月に発行予定の談話会通信をご覧ください。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：

会計担当：安田明雄 231-0861 横浜市中区元町 5-219（TEL：045-641-0763）

E-mail：kobato@gol.com

東京蜘蛛談話会例会

2004 年 11 月 21 日 東京環境工科専門学校にて



参加者一同

近況報告

八幡明彦：日本テレビで 12 月 1 日に『スパイダーマン』に関する深夜番組 1:40～2:00 があります。

池田博明：会誌の原稿募集中です。

井出和美：飼育していたタランチュラが死亡しました。

谷川明男：来シーズンの稀産種を採集直後に送って下さい。系統解析に使用します

梅林 力：小学校（総合学習テーマ“生きる”など）3 回，大人 1 回，保育園（1 時間 50 分）1 回，児童館 1 回（予定）にクモの講演会をしています。

貞元己良：丹沢調査をしたら宮が瀬ではヒルが増加。ワスレナグモのオスを自宅で採集。

小林的り子とその父：横浜青葉区から来ました。

小峰光弘：土壌動物を子供たち相手に広報しています。

浅間 茂：農文協の関係で年観察会 3 回クモ観察会の指導をしています。ブルーバックスからボルネオの自然ガイドの本を出します。

鈴木義春：ゴミグモ類とヤチグモ類に興味があります。

初芝伸吾・琢磨：仕事でたらクモ採集してます

加藤輝代子：環境工科専門学校を利用して下さい

後藤久美子：東京環境工科専門学校の2年．クモの分類の難しさを感じています．

国枝 愛：同じく2年生．クモに対する苦手意識はなくなりましたが，種名は難しい．

水山栄子：渋谷でクモの観察をしました．秋の科博のボランティアでクモ解説をしています．

佐藤幸子：横浜から来ました

高津素夢：東京環境工科専門学校の卒業生です．

新海栄一：写真生態図鑑の追い込みに入っています．カイゾクコモリグモ写真を探索中．

工藤泰恵：カラスハエトリのメス成体を自宅で発見しました．

甲野 涼：鳥の巣箱のクモを調査しています．

加藤むつみ：いま気にしている仮説「(1) まどいのかの幼体はまどいのかを食べているのではないか」．仮説「(2) 腹部の白銀色のクモの白銀物質は窒素排泄物である．元気なクモほど吸収がいいと考えると元気がなくなってきたクモの白銀色の割合が減るのではないか」．

後から参加：永井亜紀，安田明雄

講演要約

(1) 日本のアリグモ類 池田博明

日本のアリグモ属ではアリグモ・ヤサアリグモ・タイリクアリグモ・クワガタアリグモが良く知られている．しかし，主に琉球列島からヤガタアリグモ *M. elongata*, オオアリグモ *M. magna*, マガネアリグモ *M. legon*, シヤラクアリグモ *M. lugubris* が発見できた．このうちヤガタアリグモは大阪からも数多く発見されている．

(2) ヒメグモの成長と生活史

西湘高校生物部（石本舞・金田愛美・池田博明）

ヒメグモの生活史を今年 2004 年も研究した結果，7 月初めのオスのメスに対する分布が一様分布であること，幼体が出のう後に脱皮しないこと，初春には成長していないこと，世話を受けなかったサイズのクモは大きくならず初春には淘汰されてしまったことが分った．神奈川県理科部研究発表大会で私立中高協議会理事長賞（準優勝に相当）を獲得．



(3) オナガグモの捕食に関する観察例

東京環境工科専門学校有志（発表者：国枝愛・後藤久美子）

山梨県の増穂町平林・通称どんつき林道で、オナガグモ幼体の餌を 2004 年 9 月に午前 10 時からと午後 8 時から 2 時間調査。昼は 136 頭のうち 21 頭、夜 155 頭のうち 25 頭で餌捕獲が見られた。昼の餌はクモ幼体のみ、夜の餌はクモ幼体 10 例と昆虫類 4 例があった。

〔コメント〕ヤリグモがオナガグモに取られた例は初。オナガグモの獲物を採取する場合はハサミで糸を切るとよい（新海栄一）。

（以上午前の講演，以下午後の講演）



(4) Japanese Spinnen 100 年記念 佐賀合宿に行こう 谷川明男

ベーゼンベルクとストランの総説『日本のクモ』

(1906) のうち佐賀県産は 246 種。湯の川温泉・金立町金刀比羅神社を中心に採集地を選定。古湯温泉の旅館「山水荘」に宿泊する予定で、期間は 7 月 30 日～8 月 1 日。

(5) 沖縄クモ紀行 2004 年 6 月 谷川明男

台風襲来。いちばんいい時期 6 月 (6 月 10 日～29 日) に沖縄島・久米島・宮古島・石垣島・与那国島・西表島で観察。沖縄島にてワクトツキジグモ (沖縄島の沢・溪流沿いの林道のシダの葉裏に生息。産卵したが卵を食べた)，不明のササグモ，オオアリグモ，トガリシロスジグモがツノトンボを捕獲。久米島にてオオハシリグモ

(手が白くない。脱皮直後のメスにオス 2 頭来訪)，クメトタテグモ，シロスジコアシダカグモ。宮古島にはオオハシリグモはいない，ミヤコウズグモ (オスも隠れ帯をつける)，オオジョロウグモ成体，ホソミアシダカグモ。与那国島にて，イシガキアオグロハシリグモ，ホソミアシナガグモ，網を張る *Hippasa* 属のコモリグモ雌，ヤエヤマナガイボグモ。西表島にて，手の白いアオグロイシガキハシリグモ雌，白くない雄，ヘリジロツケオグモがハエを誘引している証拠は無かったが，眼前を歩いているハエを取る。



(6) 千葉県のワラ卷き内のクモ 浅間 茂

10月の第2週に日曜日に巻く。害虫退治では2月の第2週にはずすがもっと早くてもよい。寒い日にシートを引いた上に落ちた物から集めていく。成体越冬や幼体越冬など種類によって異なる。105種類を記録。キザハシオニグモ、オナガグモ、アシブトヒメグモ、ハラダカツクネグモ、イボカニグモ、オビボソカニグモ、ガザミグモ、キハダエビグモ、アサヒエビグモ(多い)、キンイロエビグモ(都市に多い)、ムツバハエトリ、アシブトハエトリ、マダラスジハエトリ(杉に)、イズツグモ(多い)、ヤハズフクログモ、ヤマトフクログモを写真で紹介。害虫よりクモの方が個体数が多い。東葛飾高校で1年目105本にワラ巻きをしてクモを標本にした翌年にはクモは半分に減った例がある。



(7) 都市公園のクモ 野鳥巣箱のすみごち

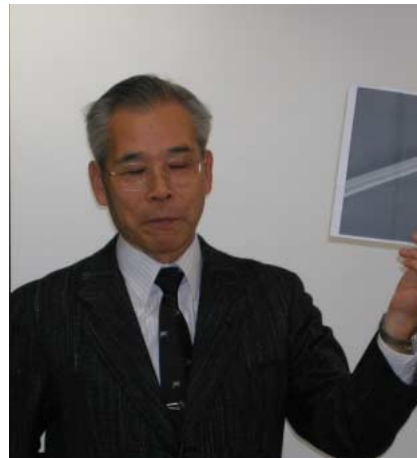
甲野 涼・初芝伸吾

代々木公園の野鳥の会の巣箱調査(2001年11月23日)に同行。ケヤキを主とした雑木林である。鳥以外にも哺乳類(ムササビ)、昆虫類(スズメバチ、ゴキブリなど)のほかクモも巣箱を利用している。15箱で虫601個体のうち23%がクモであった。種類は個体数の多い順にアリグモ類・シモフリヤチグモやメガネヤチグモ・ムナアカフクログモなど。巣箱の方位を見るとクモは北向きに多かった。南向きの巣箱にはクモが10%しか入らなかった。北向きと南向きに実験的に巣箱を置いて内部の温度変化を比較すると、南向きでは13度の日較差が生じていた。石山鉄幸の玉川大学クヌギコナラ林ではハエトリグモ科は出現していない。



(8) 電子顕微鏡で見たクモの微細構造 II 梅林 力

糸の特集。紹介した電顕写真は、緊急時のオニグモのしおり糸(何本も糸がある)、オニグモの付着盤(接着物質とこまかい糸でできる)。クサグモのシート網(細い糸や太い糸が見られる)。オオシロカネグモの



粹糸（いろんな糸が混在している）と分岐点（ある箇所ですべて糸をスパゲッティ様を束ねた外側に繊維状でねじれた物質が付着している），オニグモ・ジョロウグモ・オオシロカネグモの縦糸と横糸の接着部。

（9）中・近世の絵画に登場する蜘蛛等の虫類画・仏涅槃図を中心に。 八幡明彦

2 月か 3 月の涅槃会で図の絵解きがされる。経典には釈迦の逝去を嫌われている虫まで悲しむとあり、涅槃図の仏教儀式における意義は大きかった。虫類の描写について、文献・現物（34 件）・電話聞き取り調査を行った。蜘蛛の描かれた図は大変に少ない。鎌倉中期に最古のナガコガネグモの図像があった。中野玄三氏の動物図像研究を、虫類の詳細から補完する。12 例の涅槃図につき、登場した動物の種類でクラスター分析では 5 型に分けられた。クラスターの分類のキーはラクダ登場、日本在来の動物が増える等。虫入り率の最高は奈良の一例の 48% であった。江戸の動物写生画の多くは大名等の所有だったが、庶民が見ていた涅槃図の図像は重要ではないか。涅槃図にこれほど動物が多く入っているのは日本だけであり日本人の動物観を反映している。



（10）レッドデータブック第二次見直しの問題点 新海栄一

現在のレッドデータブックにあげられているクモは適切だろうか。準絶滅危惧のキシノウエトタテグモは東京・神奈川では絶滅危惧ですらないように思えるため、レッドデータブックの信頼を損なう恐れがある。絶滅危惧の定義には当たらないが、発見個体数が少ない種がいる。採集個体数の少ない種を少ない順にグループ分けしてみた他、確認がされている都道府県数も整理してみた。1 頭だけのヤマトジャノメグモ、メナシヒメグモ、2～10 頭のヤマシログモ、イヨグモ、ムロズミソレグモ、サカグチトリノフンダマシ、ワクドツキジグモ、タイリクミズコモリグモ、ウブゲワシグモなどがある。イエタナグモ・スズキコモリグモは最近の採集記録が無い。



夢の一里塚
「県別クモ類分布図 Ver. 2004」完成までの経緯

新 海 明

1999 年、キシダイア 30 周年記念誌に寄稿した拙文で、私は「夢」を語った (K76 号)。それは、遊絲 8 号に書いたクモリストの「絶滅の危惧」に呼応したものだった。ほぼ同様な内容のものは関西クモ研究会の「くものいと」(27 号)にも書いた。

そもそも、私がこのような「夢」すなわちクモリスト作りのキャンペーンを張ったのはキシダイア 30 周年誌の編纂作業がきっかけであった。東京クモ談話会の歴史をまとめているときに、談話会が発足した頃の熱気を思い出した。そして、30 年間の会の活動を逐一点検していると、我々がなすべき活動の「核」が見えてきたのである。それは、会員が日本(最近では世界)各地で見たクモの分布や分類生態などの記録収集だ。このことはキシダイア誕生以来脈々と受け継がれてきた談話会の精神だったものに他ならない。

一方で最近では若い会員(年齢でなく)も増え、当初の会の熱気や目的が伝わりにくくなっているようにも感じられた。我々古い会員も漠然とクモの観察や採集に明け暮れてはいまいか。30 年もの時が経てばそれらは当然といえば当然のことなのだろう。しかし、この辺でもう一度、会の原点に立ち戻るとともに何らかの形で目的を持てないものか。それは会員がすべて一致協力してやるなどというものではなく、賛同してくれる人だけが 1 年の中で 1 日でも 10 日でも協力してできる程度で構わない。それも自分のやりたいことだけ、またできることだけをやる。

こんなことを意識して編纂作業していたと思う。あれこれと思い迷うこともなく、この意識の延長線上にあった結論が「リスト作りを促進をし、日本のクモ相を解明すること!」だった。これは会員にもっとも共通した興味だったし、もっとも得意とする分野に違いなかった。私は「夢」の中で「工程表」を描いた。それは、

- ①日本産クモ類のリストの整備
- ②県別クモリストの文献目録の作成
- ③それらに基づき県別クモリストの作成

という、大雑把なものだった。そして、次に私が留意したことは、この作業はできるだけ日本各地にいる会員に協力してやってもらうということだった。これは私の怠け癖にも関係しているかも知れない。どなたかがやってくれるのなら、できるだけその方にお任せするに限る。その方が楽なのに決まっているからだ。

私はさっそく日本各地のクモ研究者に依頼状をしたためた。反響は「あった」。全国に散らばるほとんどすべての方々が応じてくださったのだ。同好の士の絆をこれほど感じたことはなかった。ここ数年間で各県別のクモリストが次々にキシダイア誌上に発表されつつあることをみてもわかるであろう。

これに先立ち、すでに谷川明男さんは忙しい勤務の合間を縫って、日本産クモ類リストの整理をし発表して下さっていた（K78）。また、安藤昭久さんはコンピュータープログラマーとしての知識を生かして、県別リストを表示するソフトの作成にとりかかってくれていたのだ。これと同じソフトを外注すると製作費として 200 万円以上はするという代物である。ああでもない、こうでもない注文をつけてタダ働きをさせてしまった。安藤さんなしではこの計画は日の目をみなかったのは間違いない。

県別クモリストの文献（K80）の作成までを終え、さていよいよ各県別リストの作成にとりかかろうとしたときに問題が立ちはだかった。この計画を兄に話したところ、県別リストは兄も計画中であり 2000 年末に発表するとのことであつた。ならば我々の出番はない。同じ計画ならダブってしまう。労力の無駄というものだ。そこで、その発表を待つことにした。しばらくすると兄が計画しているリストの内容が伝わってきた。どうやらすべて自分自身で採集したクモのリストであるらしかった。ならば、それは我々が考えていたものと性格が異なる。兄のリストが発表されたら、それはそれで追加すればよいだけだ。2001 年になり、私は県別リストをまとめ始めた。

まとめるにあたって、もうひとつ留意したことがあつた。それは「リストはすべて既報のものだけを使う」ことだった。「かつて旅行の際にこのクモを見たことがあつた」というようなデータを入れてしまうと、将来その出所を探ったときに信憑性が問われかねない。全種の出所の由来がたどれるようにしたかった。この方針をもって打ち込み始めた。まずは県別リストとしてすでにまとめられていたものを「文献リスト」からピックアップした。県別リストとしてまだまとめられていない県については、当該の県に在住の方から情報を集めて、3 ランクにわけた。ひとつは既に県内が精査されて発表に向けて準備されている方がいるところ（A）。次は、リストはかなり発表されているにもかかわらず、発表者が不在のところ（B）。3 つめは調査そのものが進んでいないところ（C）である。（A）ランクでは発表を促すこととし、（B）ランクに関しては既報のリストを我々の手でまとめることにした。（C）ランクについては各地の同好会の協力を得ながら合宿などを計画して、調査をすすめていくというものである。

2002 年の 3 月までに各地の同好会誌のリストの打ち込みはほぼ終了させ、4 月からは最後の難関である *Acta* と *Atypus* のリストの打ち込みを始める段階に達した。

当初、私は同好会誌と *Acta* と *Atypus* のリストとして発表されていた分だけをまとめて、各県別リストを作るつもりだった。新種の記載論文中の分布情報や生態報告、さまざまな断片的な採集情報は労力上から考えて無視するしかないと考えていた。「そんなずさんなリストなんかダメだ」との批判を覚悟の上で「たたき台」としてのリストを早く完成させたかったからだ。行き届かない点はあるからいろいろな方から補ってもらえばよい。私のアバウトな性格の為せる業である。この計画なら 2002 年中に作業は終了するはずだった。

ところがである。このことを相談した谷川さんに「彼の夢」を語られてしまったのだ。それは、今までに発表された分類分布生態など彼の手元に集められた一切の資料をすべて

県別リストに利用可能な形でまとめたかったというものだった。これを聞いたときの私の気持ちは正直少したじろいだと思う。「なんと無謀な!」「どえらいことを提案するな」というものだったと思う。けれども、一瞬のめまいをかなぐり捨て「この際とことんやってやろうじゃないか」と奮い立った。ひとりより二人、ふたりより三人。持つべきものは「友」である。Acta や Atypus に掲載されたほぼすべての報告、さらに各地の博物館などに掲載された文献、はてはヤパーニッシュ・シュピネン（おもに、佐賀県で採集されたクモをもとにわが国のクモを最初にまとめたドイツの文献）にまで作業対象は広がった。新種の記載中にある採集記録もすべて各県別に整理したし、「××山のクモ」など県境をまたいで発表された報告などは、地図を片手に採集地点を県別に整理して打ち込んだ。生態などの報告でも何県で調査されたかがわかるものはできるだけ取り入れることにした。

2002 年 4 月から毎月 1 回、谷川さんの勤務先である神奈川県立七里ガ浜高校での打ち込み作業が開始された。私が密かに無視すればよいと考えていた戦前や戦中にまとめられたクモリスト（これらには訳の分からなくなったクモの和名が数多く登場するのだが）も洩れなく扱った。ハエトリグモの一種エチゴアサヒやエビグモ類のヤブエビグモ、ワシグモ科のヨシダグモなどなど。とりあえずピックアップしておき、後に学名が添えられていたり、その和名や素性が述べられた文献に出会うたびに、ひとつずつ今の和名に直してリストに加えていった。キシダイア 85 号に掲載された「昔の名前ででています」はこのような経緯で誕生した「夢」の余録である。

打ち込みの作業は毎月 1 度と決めた。こんなことを月に 2 度 3 度とやると体がもたないし、やる気も失せてしまう。夕方 5 時までには仕事を終えて午後 6 時には「正しく」藤沢や鎌倉の街へ飲みに出掛けた。この楽しみがなければ、こんなうっとおしい作業などできるわけがない。

こうして、2004 年 7 月に県別クモリストが一応の完成をみたのである。トータルで 40340 件のデータを入力した。日本産のすべてのクモが 1 種類ごとにどこで採集されているか県別に地図上に表示され、その出典の文献の一覧も種ごとに添付されている。これを覗いた方は、この種類は分布上少し問題があるとか、この県ではこんな種類も採ったことがあるとかの感想やご批判があると思う。私たちもチブサトゲグモが内地にこんなに分布しているはずがないと思うし、東北地方のチュウガタシロカネグモはオオシロカネグモの誤りであることは承知している。それらは色分けして注意を促して表示することにした。誤りと判っていても、すべて過去に発表された文献に載っていたものである。勝手に消去することはできなかった。苦肉の折衷案とご理解願いたい。

このリストをひとつの「たたき台」として、これに少しずつ批判や不足分を積み重ねていくことで、より充実した県別クモリストに成長させていけたらと考えている。50 年後、100 年後の日本のクモ学の発展への一里塚になると信じての事である。

ご理解とご協力を賜り、そして是非ともご購入いただけたら幸甚である

クモを身にまとう人々

谷 川 明 男

学会大会や談話会の例会，採集会などでお見かけしたクモを身につけた人々の写真を集めてみました．





以上 13 枚の写真のうち 5 枚は同じ方の写真です。

入退会は：

事務局 初芝伸吾 186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 (有) エコシス
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

通信担当 谷川明男 247-0007 横浜市長区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

談話会通信次号の原稿締め切りは2005年4月末日です。ご投稿お待ちしております。

KISHIDAIA 原稿投稿先：

会誌担当 池田博明 258-0018 足柄上郡大井町金手 1099
E-mail : fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp